

ニホンジカの低密度管理に向けて（第3報）

1. 目的

・ニホンジカの摂食被害が日本全国で拡大傾向である中、赤谷プロジェクトでは、これまで「赤谷の森」でニホンジカの低密度管理の取組を行っており、令和3年度は、くくり罠（15基）、箱罠（2基）による捕獲試験を6月と10月の2回行いその結果、箱罠で1頭の捕獲に成功した。そこで今年度においては、初めての取組である、GPS発信機首輪を用いた行動把握調査により、ニホンジカの季節移動・越冬地について検証し、今後における、効率的な捕獲方法について検討した。

2. 赤谷の森の現状

・赤谷の森のニホンジカの生息数は、他の地域と比べればまだ低密度だが、近年はセンサーカメラの撮影頻度及び植物等の摂食被害の状況から確実に増加の傾向が見られる。このまま対策せずにいればたちまち被害が広がり生態系や生物多様性に多大な影響を与えることが懸念されている。

3. ニホンジカのGPS発信機首輪を用いた行動把握調査

- ・調査機材（写真1）
受信アンテナ・首輪コントローラー・首輪コントロールソフト（専用スマートフォン）
- ・捕獲対象
メスの成獣（オスは行動圏が不規則であり、季節移動や越冬地の把握に適していないため）
- ・捕獲方法（写真2）
平成30年度に箱罠による捕獲を試みたが、ニホンジカの警戒心が強く捕獲には至らなかった。しかし、その後も箱罠を設置し続け、鈎塩（家畜用の塩）による誘引を継続したところ、令和2年度には箱罠への警戒心が薄れたことが確認された。そこで、令和3年度に、改めて箱罠を本稼働させたところ、小出保で6月24日にメスの成獣1頭の捕獲に成功した。
- ・装着方法（写真3）
箱罠により捕獲したニホンジカを麻酔により眠らせGPS発信機首輪を装着し放獣した。
- ・調査方法（写真4・5）
受信アンテナを用いて首輪から発信されるビーコンをたよりにニホンジカの居場所を特定し（ビーコンを受信するには、首輪から約2キロメートルの範囲まで近づく必要がある）、コントローラーで首輪に蓄積されている位置情報を取得した。初めは居場所の特定に苦労したが、一度位置情報の取得ができれば、その後は、それをもとにして、週に1度のペースで追跡調査を行うことができた。



（写真1）調査機材

（写真2）箱罠で捕獲したニホンジカ （写真3）GPS発信機首輪を装着 （写真4）追跡調査の様子 （写真5）データのダウンロード

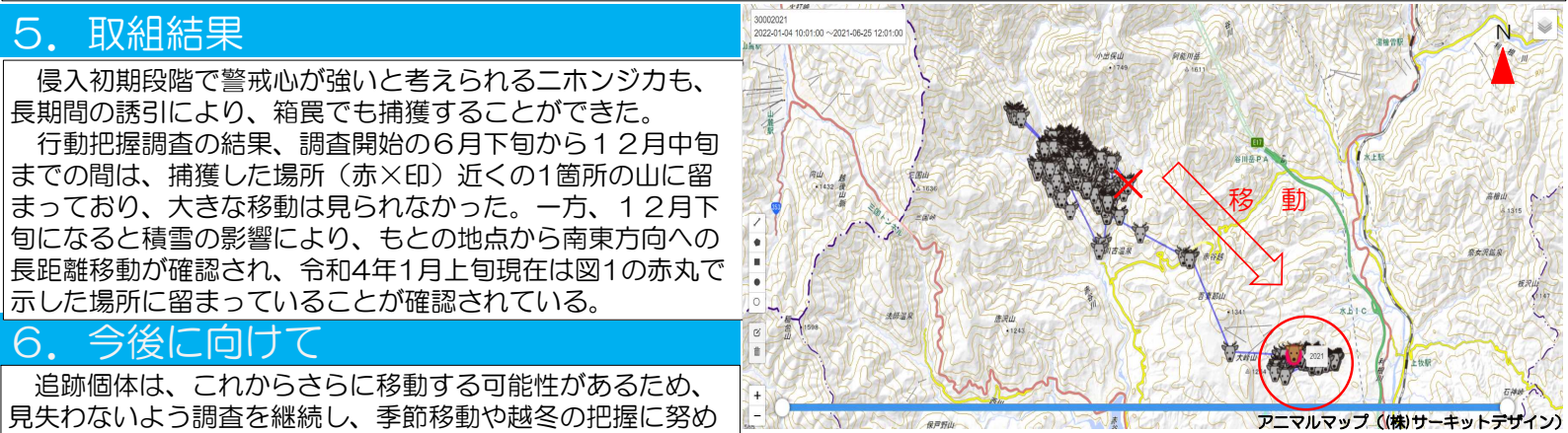


4. 捕獲における工夫

令和3年度は、捕獲には至らなかったものの、くくり罠による捕獲試験も実施した。くくり罠は基本的に毎日の見回りが必要となるが、労力軽減のため、通信機能付きのセンサーカメラと群馬県林業試験場主席研究員の坂庭氏が開発した通報装置（仮称）を試験的に導入した。前者は動くものの写真を一定間隔で撮影し送信するもので、後者はくくり罠に繋いでいるロープが引っ張られると、発信機が作動し、メッセージが送信されるものである。また、週末の捕獲は職員が対応できないため休止期間とし、週明けに職員が罠の安全ピンの開錠及び罠のメンテナンスを実施した。

5. 取組結果

侵入初期段階で警戒心が強いと考えられるニホンジカも、長期間の誘引により、箱罠でも捕獲することができた。行動把握調査の結果、調査開始の6月下旬から12月中旬までの間は、捕獲した場所（赤×印）近くの1箇所の山に留まっており、大きな移動は見られなかった。一方、12月下旬になると積雪の影響により、もとの地点から南東方向への長距離移動が確認され、令和4年1月上旬現在は図1の赤丸で示した場所に留まっていることが確認されている。



（図1）ニホンジカの移動軌跡